

巻頭言

血管病の重要性

阪口周吉*

本誌の編集に何らかの力を貸すようにとの御依頼を受け、小生にとっては甚だ名誉な御選択であると喜んでお引受けしたが、よく考えてみると“循環制御”と小生の専門とする“末梢循環障害”とは、言葉は似ていてもかなり内容が異なるものである。どのような仕事と与えられるにせよ、困った事態にならなければよいがと案じていたら、初めての仕事がこの巻頭言の執筆で、たちまちそのテーマの選択に頭を悩ませることになった。結局知らないことは書きようがないので、この際は我田引水をきめこんで、末梢循環の問題をとり上げ、とも角その責を果たすことにした次第である。

最近の医学界の話題は何といっても臓器移植とそれから脳死などの問題であるが、しかし依然として国民死亡率の第一位を占めるガンに対する関心は高い。これを撲滅することはわが国のみならず、全人類の悲願であり、これに向って多くの医学者が努力を傾注している。元来科学研究などにはほとんど金を注ぎ込まない主義のわが日本政府も、さすがにこれだけは支援の態勢をとり、最近では巨額(?)の研究費がガン関連の研究に投じられている。ガン患者はそれとわかってからも死に至る迄時間があり、その間の肉体的、精神的苦痛は目を覆うものがある。ガン告知の問題も含め、過程のドラマ性も人間感情にアピールすることは事実であろう。かくして最近のガン研究は、とくに早期発見の診断技術においてすばらしい進歩をみせ、その克服も近いといふところまできた感じがある。

しかしこのような華々しい学問分野にかくされたいはいるが、実は国民医療的にもう一つ見落とし

てはならない疾患群がある。常々小生も将来的にはこちらの方が問題になるのではないかと考えていたが、これをいみじくも喝破してくれたのが近畿大学の松尾理教授¹⁾である。以下にその御指摘を抜粋させていただく。

厚生省によれば昭和58年度の国民死亡率の第1位は悪性新生物で約17万人、これに次いで脳血管疾患14万人、心疾患13万人となっている。しかし実はここに統計のカラクリがあって、第2位の脳の6割は脳梗塞、第3位心の4割が虚血性心疾患、さらにガン死には血拴塞栓死が覆いので、これを約1割とみて以上全てを合算すると血拴塞栓死は約16万人となりガン死と同数となる。さらに全ての臓器に発生した悪性腫瘍をまとめて死亡の第1位にあげているのも問題で、これを各臓器ごとに分割すると、第1位の胃ガンは肺炎死と、第2位の肺ガンはわずか2万人で自殺者と同順位となる。

また傷病別受療率でみると、人口10万人当りで脳血管疾患、虚血性心疾患の合計は悪性新生物の約2倍となっている。かりに病因論的には同一と考えられる脳、心、高血圧症による死をまとめてみると、何と総死亡の41.5%を占めているのである。

以上は昭和58年の統計であるが、60年になると心疾患が脳を抜いて死因の第2位に上がり、中でも増加しているのは虚血性心疾患である。増加の原因は云うまでもなく“文明病”であって、前述統計の総死亡41.5%という数字が、先進11カ国の中でもなお最低であることからみて、今後なお著しい増加の余地を残しているのである。

以上の死因統計分析はやや概略的であるが、大体の傾向としては肯けるものであることに気付かれたであろう。すなわちもし本気に国民の死亡原

*浜松医科大学副学長

因を減らそうと考えるならば、少なくともガンに対すると同様に、あるいはそれ以上に血管病対策を急がねばならないのである。ところが現状では一方のガンのみに対して種々の計画や対策があり、それに対して巨大な研究費が投じられているのに反し、心血管病に対してはほとんどみるべきものがなかった。ようやく最近国立循環器病センターができ、これを中心に班研究が始まり、成果が現われ始めたところであるが、最も大切なのは発生予防であることは論をまたない。従ってガンと同じく強力な PR と国民意識の向上をはかる計画を推進しないと、現在のように欧米型食生活の動物性脂肪の摂取過多、運動不足、肥満による心機能の低下、ストレスなどの複合要因¹⁾を放置しておく、近々数年のうちにゆゆしき事態となるであろうことが想像される。

このことは我々のように日常血管病を扱う臨床医にとって切実に感じる事実である。かつて昭和38年に西独に留学した小生は、かの地における動脈硬化性疾患の汎濫に一驚したが、40年代後半からわが国でも著しい増加をみせ、今や西独をものぐ勢であると感じる。かつて外科病棟には虫垂炎や胃潰瘍、胆石と云った疾患の患者が溢れていたが、今はそれに代るのが動脈閉塞症、大動脈瘤となった。この先どこまで行くのか見当もつかな

い状況であると云ってよい。

これらの脳心血管病の死因は全て動脈硬化と血栓塞栓の複合と考えられるが、近年その予防や治療に新しい方法が続々と開発されつつあるのは心強い。対策の遅れか、アイデアが貧困なのか、我国では常に外国より一步の遅れで始まるのは残念であるが、血行再建、血栓溶解、PTA、Laser angioplasty などが臨床で成果を挙げつつある。まだ試行錯誤の域を出ないが、近いうちに最良の方式が確立されてゆくであろう。

前述したように、ガン死は慢性死であるから過程がドラマチックであり、エイズなどと同様にマスコミも大きく取り上げる。一方血管死は急性死であるから、悲惨な状況が少ない。だがやはり死であることに変わりはない。死亡率を減らし、国民の長寿を願うなら、マスコミなどもこの疾患に注目すべきである。最も大切な国民の基礎的認識と関心を昂め、いかにして血管病の発生率を抑制するかの予防対策に本腰を入れるべき時にきていると思われる。

文 献

- 1) 松尾 理：血液凝固線溶系の最近の考え。t-PA と Pro-LIK, p. 1~4, 学際企画, 東京, 1986.